沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要（Bull. Mus., Okinawa Pref. Mus. Art Mus.），№. 14, pp. 33-62. 2021

中国大陸沿岸部における倭寇関連の小規模城郭遺跡
―福建省北部・霞浦県を中心に―

山本正昭[1)]

Pirates-related small castle sites in Coast of Mainland China

Masa'aki YAMAMOTO[1)]

はじめに

琉球列島の中で最大の面積を有する沖縄本島には世界遺産に登録されているグスクをはじめ、1万㎡を超える大規模グスクが管見の限りでは少なくとも15カ所は見ることができる。その沖縄本島と同緯度にある中国大陸沿岸部の福建省霞浦県東冲半島周辺地域には面積が1万㎡前後の小規模な城郭遺跡が数多く所在しており、その密集度は福建省内でも随一ということが指摘されている（霞浦県地方志編纂委員会編 1999）。

この東冲半島周辺は、福建省沿岸部の中でも最も複雑に海岸線が入り組んでいるリアス式海岸を呈しており、大小の島々が点在している。また、東冲半島の北側には東吾洋と呼ばれる内海が形成されており、現在は多くの海産物養殖場が見られることから、普段は波が穏やかな海域であることが容易に想像される。更にこの波の穏やかな内海に面して多くの漁村を現在、見ることができる。他方で、この地域では平地が僅少であることから、生活の糧は海産物であることは各集落の市場に見る品揃えからも想像できる。このような地域性であるが故に14世紀後半ごろから16世紀にかけて倭寇による襲撃が多発していたことが明代の史料で窺うことができる（註1）。この時期における倭寇の活発化によって明朝は1387年に東冲半島の東岸に位置する大金に倭寇取り締まりのための機関である千戸所を設置するに至った（註2）。以上から、当該地域は周辺海域と強く結び付いていたことを窺わせる。

冒頭で触れた当該地域に所在する城郭遺跡の大半が沿岸部近くに所在していると共に倭寇に関係する伝承が残されている。本稿ではそれら城郭遺跡を個別に取り上げていき、当該地域に見られる城郭としての特徴を洗い出していくものである。

1．対象とする城郭遺跡について

対象とする城郭遺跡は基本的に防御施設を伴っている遺跡とする。東吾洋、東冲半島周辺で確認できた、防御施設伴う遺跡は堅固な障壁、本稿では城壁としてとして記すが、当該地域では城壁で囲繞される集落を城郭遺跡の基本的な在り方とすることができる。この城郭遺跡における城壁構造については以前に紹介したことがあり、その中で倭寇によって「民間人も自衛のために生活域に近接して城壁を構築していく」と集落の防御化が促される背景を推察した（山本2019b）。元は中国大陸沿岸部の治安維持のための明朝による衛所制度が14世紀後半に実施され、倭寇の対抗措置としていた。明朝はその実行施設として14世紀後半に、北は遼東半島から南は海南島まで衛城や所城を築いていく（張ほか2019）。しかし、16世紀に入ると制度そのものが弛緩し、有名無実化していったことから（山崎2003、鄭2013）、明朝に拠ることのない、倭寇に対する民間人主体の自衛策として集落を城壁で囲繞する（註3）。

乾隆年間（1736 ～ 1795年）に編纂された『福寧府志』には南は沙蛤、竹屿、南屏、西は厚首、清皓東は七都、三沙、北は柘洋之西林といった地域において1555年から集落を城郭化し始めたと記されており、1767年に李抜が記した『福寧府誌』に拠

1) 沖縄県立博物館・美術館　〒900-0006　沖縄県那覇市おもろまち３-1-1
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan

れば３７カ所、1967年に黄成助が著した『霞浦県誌』に拠れば約４０カ所、霞浦県内には城壁を伴う集落が所在している旨が記されている[註4]。これら地域の集落を城壁によって囲繞していく目的として、嘉靖年間（1522～1566年）に活発化する倭寇からの略奪・破壊行為に対抗するため、16世紀半ば頃から集落住民が中心となって城壁を構築していくことも記されている。このような集落住民の動態は『福寧府誌』と『霞浦県誌』の両史料において見られ、嘉靖期における倭寇による掠奪行為の苛烈さを窺い知る事象として取り上げられる。また、『霞浦県誌』では東冲半島周辺周辺に所在する集落において実際に２４カ所の集落においてその城壁が残存していることが記されていることも上記の事象を裏付ける物証として挙げられている[註5]。

これらの史料に窺える倭寇に対する解釈は戦前から示されておりまた、倭寇について記載されている史料ごとに倭寇の解釈も異なる（山崎2017）。本稿における倭寇は14世紀後半～16世紀において中国大陸沿岸部で見られる略奪行為や闘争行為まで含むものとして捉える。

以上をまとめると、文献史料から読み取れる当該地域の城郭遺跡の有り方として、集落住民が自衛を目的として、集落に城壁を構築していることと、嘉靖年間における倭寇の略奪に対抗することを構築の契機としている。一方で、この時期の城郭遺跡において集落のどの場所に城壁を設置しているのか、城壁の規模についてはどの程度なのか、周辺の立地状況、そしてどのような防御性を看守できるのかなど、具体的な有り様に関しては文献資料には見ることができない。

このことから、筆者は実際に霞浦県内で現地調査を実施し、現状から確認できる当該地域の城郭遺跡の実態について把握することを試みた。その結果、2019年３月時点までに東吾洋、東冲半島周辺において16カ所の集落内ならびにその縁辺部において城壁の遺構、またはその痕跡を確認することができたことから（図１）、これらを本稿では当該地域における城郭遺跡を対象とし、とくに城域が明確に把握できる11カ所を次章において取り上げていく[註6]。なお、東冲半島周辺は北から沙江鎮区、溪南鎮区、長春鎮区、下滸鎮区の４地区に分かれており、それぞれの地区ごとに触れていく。

２．沙江鎮区

①下村城堡（図２）

東冲半島の付け根に位置する方厝城集落内に石積みの城壁で囲繞された空間を確認することができる。東西約200m、南北約130mで、周長は約930mと推測される。

図１　東沖半島・東吾洋周辺の城郭遺跡分布図

東沖半島とその北側に位置する沙塘港周辺との間は東西方向に延びる山地で画されており、北麓の段丘面に方厝城集落は位置している。北側一帯は水田地帯となっており、北東約1kmの位置に海岸線が面している。東西南北を画する城壁がそれぞれ残存しており、全て石積みで築かれている（写真１）。

残存状況としては南面と西面の城壁は良好に残っている一方で、東北隅は居住区であることから、撤去されている。また、東面は積み直しも多く見られる。城門は西面中央に三心円アーチ形式の門を見ることができる（写真２）。基底幅１m、高さ1.9m、奥行き2.2mを測る（写真３、４）。東面にも城門が見られるが石積みの積み直しが著しく、かなりの改変を受けている。北面の城門については、その痕跡が窺われない。しかし、北側にある街道から分岐する旧道が取り付いていることから、やや西寄りに城門が位置していたことが想定される。

北面と西面の城壁は高さ約2.5～3mで南面は最高で約4m、上端幅約3.5mを測る。東面は石積み

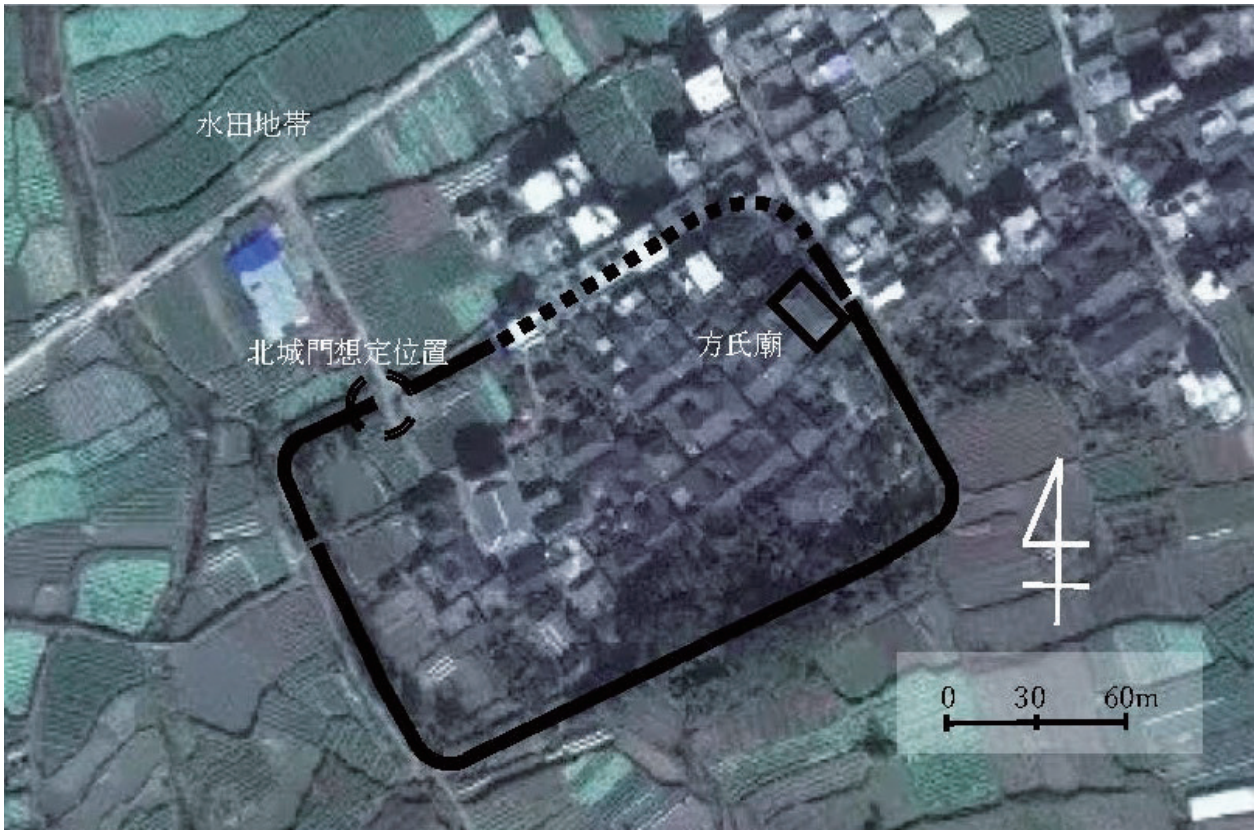

図２　下村城堡平面概要図

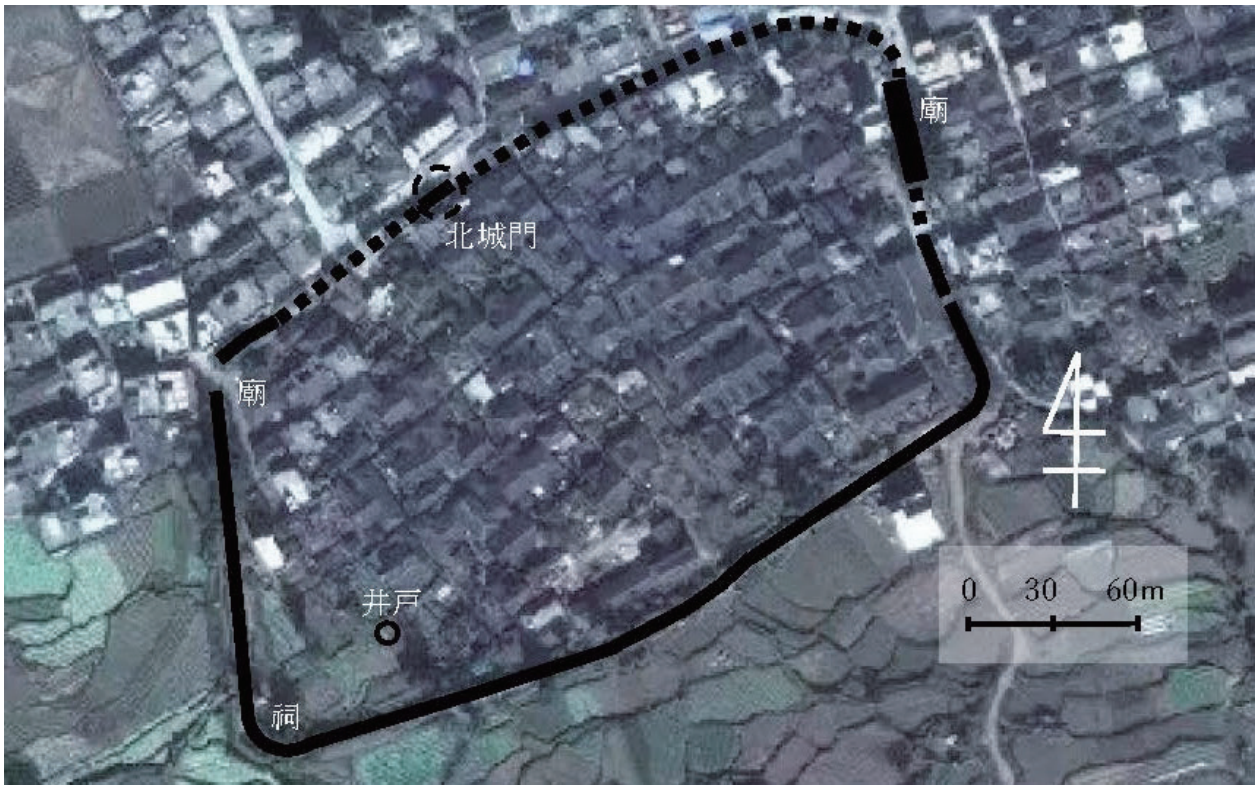

図３　古県城堡平面概要図

の積み直しが多く見られるため、旧来の高さを保持しているかどうかは判然としないが、高さ約2.5～3mを測る。この東面の城内側には城壁上に登坂する石段を一か所見ることができる（写真５）。また、南西隅の城壁上には祠が設置されており、現在は城壁外に参道が取り付いている。『霞浦県誌』には当該城郭は二層構造となっており、内側は謝一族が、外側は方一族が構築したとあり、旧称は「方厝城」であったと記されている。なお、方氏の廟が東面城壁内側に面して所在している。

②古県城堡（図３）

方厝城集落から西へ約２㎞に位置する古県集落の一画に石積みで囲繞された空間を見ることができる。その規模は東西290m、南北170mで、推定周長は890mとなる。

古県集落の北側は水田地帯となり、南側は畑地が広がる。河岸段丘面に位置しており、北側約150mの位置には東西方向に流れる河川が見られる。また、西側には北方の山地から派生した低丘陵が広がっている。

石積みの城壁は東西南北面で見られるが、北面の城壁は城門周辺のみの東西８ｍほどが残されており、しかも外面は近年における積み直しが著しい。城門は10枚以上の天井石を架けており、その上に祠を設けている（写真６）。この城門前の道はかつての城壁ラインに沿って東西方向に延びていることから、城壁で囲繞されていた範囲を概ね推測することができる。

最も良好に残存している城壁は南面で、高さ４～５ｍを測る。南西隅には廟が、やや西寄りには小さな祠が見られる。また、城壁外面石積みには2カ所ほど補修を行ったと思われる縦目地が通った部分が見られる（写真７）。城内側（図３内の黒丸内）には一辺１ｍ前後の方形枠で象られた石造りの井戸が現在も見ることができる（写真８）。西面は、南西側は残存状況が良好で、北西側は廟が設置されていることによる公園化で、大きく改変を受けている。高さは４～５ｍで石材の一部には石臼を転用材としているのが確認できる（写真９）。東面は、北西隅は廟が設置されていることから大きく改変されており、南西隅は集落から北側へ抜ける農道によって切り崩されているものの、かつての城門が残っているのを確認することができる。現在は鶏小屋として閉鎖されているものの、数枚の石板を載せているのが確認することができる。周辺の城壁は高さ2.5m～3.5mで上端幅は3.5～４ｍ、基底幅は確認できる範囲では約８ｍを測る。

『霞浦県誌』には城堡が今も残るという記載が見られる。また、『福寧州志』巻16「雑事志下・時事」には嘉靖31年（1551）に倭100人余が古県を掠略したとの記載も見られる。

③小馬城堡（図４）

小馬集落は東吾洋の北岸に位置し、海岸線に接する集落である。この小馬集落の中心部を石積みの城壁が囲繞する。近年の「村頭公園」の整備によって海岸部近くの城壁は大幅に改修が加えられていることによる積み直しが著しいため、かつての城壁ラインを辛うじて窺い知り得る（写真10）。加えて北西隅は展望台としての整備が行われ、旧状がかなり失われていることから、海岸側の東面は大きく景観が変容している。南側にはアーチ門が見られるが、これも近年において改築されたものである。南面についても宅地化によりほとんど城壁の痕跡は留めていない。南東隅にはアーチ門と共に城壁を見ることができるが、公園化によって積み直しが行われており、旧状が失われている。この南側を画していた城壁に沿って走っていた護城河が現在も集落内の用水路として使われているため、かつての城壁ラインを追いかけることができる。この南面中央付近には宅地建物の間に挟み込まれるようにしてかつての城門が残されているのが確認できる（写真11）。天井には板石８枚を架けており、高さ約２ｍ幅、0.9mで外面のみが残存している。東西方向に延びる護城河は南面のみに見ることができ、東側は海へと繋がる。西面の城壁は残りが良好で、集落宅地内を南北に画している。南西隅には持送り式のアーチ門が見られる（写真12）が公園化によって、城壁を従来よりも高く増築されている。また、城壁上には女墻が新たに付け加えられ、城門上から城壁にかけて園路を敷設するなど、改変が著しい。それでも城門のアーチ部にはあまり改変を加えておらず、4枚の天井石を架設しており、幅1.8m、高さが約2.5mを測る。この

図４　小馬城堡平面概要図

図５　八堡城堡平面概要図

城門から東へは高さ２～3.5m、幅約４ｍの城壁が延びており（写真13)、集落の東側に広がる丘陵上へ城壁は上りながら続いていく。集落側にある城壁は石積みが見られるが、丘陵側の城壁は土壁状となっている部分が多い。これは後世、石材を転用するために取り外したことによるものと考えられる。東面の城壁ラインについては、下草の繁茂により踏査することができなかったが、遠望する限りでは丘陵の尾根線に沿って城壁が延びているのが確認された。あわせて、衛星写真では不明瞭ながらも城壁ラインを確認することができる。

城壁で囲繞された範囲は東西約290mで南北の長軸は約250m、周長は約950mと推測される。『霞浦県誌』には今も残ると記されるのみである。

④八堡城堡（北堡）（図５）

八堡集落は東吾洋沿岸から北西へ約３㎞内陸側に位置する盆地のほぼ中央部に位置する。集落は畑地が周辺に広がり、北西から南西方向に流れる小河川が隣接する。この集落南西端に石積みで囲繞される空間が見られる。城壁はほぼ完存しており、本稿で対象とする城郭遺跡の中で最も残存状況が良好である。城壁は高さ3.5～５ｍで城壁の上端幅は2.5～３ｍ、基底部幅は５ｍ前後を測る。

城壁上には高さ１ｍ前後の女墻を確認することができる。城門は北西面と南東面中央部に各1カ所見ることができる。とくに特徴的なのは北西面の城門で甕城[註7]となっており、半円状に張り出す（写真14)。この張り出しの突端部にて銃眼が女墻に穿たれているが認められる（写真15)。甕城のすぐ北側には旧道が走っていることから、この道を進行する寄せ手に対して銃眼は向けられていると言える。また、外側城門の間口周辺のみが切石で積まれており、石積み勾配は90°近い（写真16)。更に、積み方は石材に角欠きが見られることから、横目地は完全に通っておらず、複雑に組み上げている部分も見られる。城門は高さ2.5m、幅1.6m、奥行４ｍを測り、城門上には「西城門」と刻まれた石板が置かれている。内側の城門については、幅が約２ｍで城内側には城壁上に登る石段が取り付いている。そして、この城門から石畳が内部の居住区内の通路ならびに城壁内側沿いに敷設されている（写真17)。この城門から北東側へ延びる城壁上の女墻にも一カ所、銃眼が穿たれており、外側には旧道が近くに通っていることから、先の銃眼と同様の機能が見て取れる。もう一カ所の南東面にある城門については高さ2.5m、幅２ｍ、奥行４ｍを測り、間口周辺のみが切石で積まれている（写真18)。天井石を架設しており、その上に「東門」と刻まれた石製の額が掲げられている。また、同じく「同治四年」の銘が見られることから、城門がこの年に改修されていることが窺われる。城壁で囲繞された範囲は約110m四方で、周長は421ｍと推測される。

城壁で囲繞された内部は清代まで遡ると思われる木造建築が密集しており、西側には畑地と遊水池が見られる。内部の区画は北西面の城壁から南東面の城壁まで貫通する石畳が敷設された通路が3条見られる一方で、南西面の城壁から北東面城壁まで貫通する通路は見られない。聞き取りではこの区域に居住する人はわずかで、東隣に広がる居住域へ遷ったとのことであった。そのためか、北東面の城壁を一部開削して小径が後世につくられている。

城壁の南西面と南東面の城外側は公園化が進んでおり、造成によりかなり改変されている。かつて南西面の城壁外側には護城河が見られたが、現在は公園化のために整備されて暗渠となり、その様子を窺い知ることはできない。また、この護城河は城壁内にある遊水池からの排水する水路として機能していたものと想定される。

『霞浦県誌』には「北堡」として記され、当村は８つの有力氏族によって城堡が築かれ、このうち陳、林、梅、彭氏等が今も残っているとある。また、南東面の城門近くに設置されている石碑には1553年に築城、1865年に修復されたことが記されている。また、2010年に霞浦県級文物保護単位に、2012年には第八批省級文物保護単位、更には2017年、福建省第二批省級伝統村落に指定されている。

⑤龍湾城堡（図６）

龍湾集落は八堡集落と同じ盆地内の東端に位置する。周辺には畑地が広がり、北側には小河川が東西方向に流れている。また、南側は山地が広がり、集落内も北から南にかけて緩く傾斜を有している。集落南西側には石積みで囲繞された空間を見ることが

図６　龍湾城堡平面概要図

図７　厚首（臨江）城堡平面概要図

できる。この石積みで構築された城壁は北東隅と北西隅の一部が撤去されている以外は全て残されており、東面には6枚の、北面には3枚の天井石を架設した城門がそれぞれ1カ所、確認することができる(写真19)。何れも間口近くは切石で積まれており、薄く板状に加工されている石材が用いられている。北面の城門については城内側へ石積みが約３m張り出しており（写真20)、通路空間を形成している。城門周辺の城壁は高さ2.5 ～３mで、城壁の上端幅は1.5 ～２m前後、基底部幅は約3.5mを測る。東面の城壁は内側に沿って石畳が敷設され、北面には城壁の外側に沿って石畳が敷設されている。南面と西面の城壁は表面の石材が撤去され、土塁状となっている部分が多く、土取りも行われているため高さも不揃いである（写真21)。とくに西面の城壁は高さ３～４mを測り、城壁外側に沿って用水路を見ることができる（写真22)。この用水路は護城河と考えられ、南側に隣接した遊水池まで続いている。また、城内の廃水を護城河へ排水するための暗渠が城壁の基底部近くに設けられているのを確認することができる。

城壁で囲繞された範囲は東西約160m、南北約120mで、城周は520mと推測される。南面の城壁は僅かに蛇行しており、北西隅は北東―南西ラインの城壁となっているため、全体プランは方形にはなっていない。北西隅の状況要因については、北西側に遊水地が隣接していることによる制約と考えられる。内部は主に木造民家が密集しており、南西部には畑地を見ることができる。

『霞浦県誌』には今も残ると記されるのみである。

⑥厚首城堡（臨江城堡）（図７）

東吾洋の北側にある湾状の海岸線西端に厚首集落が位置し、その集落の一画に石積みで囲繞された空間を見ることができる。東側は近年の埋め立てによって陸地化しているが、かつては海岸線に面していたと想定され、西南北は平坦地となり宅地が密集している。この集落の西側外縁部は水田と畑地が広がり、北側には南西から北東にかけて小河川が流れる。

石積みの城壁が東面の一部を除いて残存しているものの、近年の積み直しが各所において見られる。城門は西面が良好に残っており、城外側は天井石を架設し、城内側は一部、塼によるアーチ構造の天井となっている（写真23)。間口の高さは2.2m、幅は1.5mを測る。また、城内側へ城壁が張り出しており、通路空間を呈している。この城門周辺の城壁は高さ４m前後で上端幅は３～４mとなり、高さ0.7mの女墻（写真24）が確認できるのと、城門の南側に隣接して城壁上に登る石段が取り付いている。北面の城門は2カ所あり、西側の城門は天井を持たない単純な構造で、東側の城門は塼によるアーチ門となっている。このアーチ門の間口の高さは2.7m、幅は1.5mで、眉石の上には「臨江古城」の石板が嵌め込まれている（写真25)。また、城門内には当該城門の修復記念の石碑である「修城碑」が建てられており、2011年の銘が刻まれていることから、この周辺が近年において改変されたことが窺える。これら両城門を結ぶ城壁は高さ５～６m、基底部、幅５m前後にも及び、当該城壁の中でも最も高い石積みとなる（写真26)。北東隅周辺の城壁は宅地化により失われているが、東面の城門についてはモルタル屋根のアーチ門を見ることができる（写真27)。更に城壁は南側へ続くものの、南西隅周辺は宅地化により大きく損壊しており、僅かに城壁の基底部近くが確認できる。南面には2カ所の城門を見ることができ、何れも天井石を持たない。この南面の城壁は高さ４mで、城壁上には胸壁が確認できる。但し、城内側の壁面は宅地化により、崩されている。

城壁で囲繞された範囲は東西約180m、南北約240mで、城周は1200mと推測され、城内は全て宅地化している。南面東側の城門から南北方向に直線状に延びる街路と西面の城門から北面東側の城門とを蛇行しながら結ぶ街路が現在の城壁内における主要街路となっている。

『霞浦県誌』には厚首村に所在する「臨江堡」に比定でき、今に残るとある。また、先述した修城碑によると1546年に築かれ、咸豊年間（1851 ～1861年）に改修されたとある。なお、2010年に霞浦県文物保護単位に指定されている。

３．溪南鎮区

長興城堡（塘辺城堡）（図８）

東吾洋の東端から内陸側に北西方向約4㎞に盆地

が見られ、その中央部のやや小高い丘陵裾部に長興集落は位置している。南側は畑地となり、北側には低丘陵が広がることから、集落は南から北にかけて標高が高くなる。この集落の北側一画に石積みで囲繞された空間を見ることができる。

石積みの城壁は西面の南側と北東隅が失われている以外は良好に残存している。城門は南面にのみ見ることができ、天井石が4枚架設されている。加えて、間口部分は切石が用いられており、雲唐草文様が石彫された板石が面石で使われていることから(註8)、転用材として持ち込まれていることが窺われる（写真28)。城門の高さは２m、幅は0.8m、奥行きは2mを測り、周辺の城壁の高さは約３～3.5mほどである。城門の内側は石積みが約３m張り出しており、通路状となっている（写真29)。この門から城内東側に隣接して「燕楽亭」と称されている廟が内面城壁を切り崩して建てられており(註9)、更に東側には城壁上に登る石段が見られる（写真30)。また、城門から南西隅までの城壁については城壁上にモルタルによる女墻が新たに設置され、城壁上の床面もモルタル張りがなされている。この城壁は高さ３～3.5m(註10)で、上端幅は約３m、内外面共に石積みの目地をモルタルで埋めている箇所が散見される。西面の城壁は南側が失われており、北側は全く新しい石壁となっている。北西隅には祠が建てられており、その参道として一部崩され、基礎擁壁としてモルタル壁に改修されている。北面は新たに城壁の幅を広く増築しており、内外面の石材は全て撤去されている（写真31)。また、北東隅は集落内への通路として、大きく切り崩されている。東面は城壁上が集落内通路となっており、城壁の上部は削平されて基底部近くの石積みが残るのみである。また、城壁の上面は通行に供するため、拡幅されている。南東隅は後世の宅地化によって、城壁上に建物が密集していることに合わせて城壁の外面のみが確認できる。

このように、全体的には囲繞する城壁ラインは確認することができるものの、石積み遺構として良好に残存している箇所は南面の城門周辺のみであると言える。また、現在確認できる城門は南面のみであるが、内部の通路区画を見ると東西方向に走る通路が２条見られることから、この何れかの東端延長線上に城門が存在していたことが想定される。

城壁で囲繞された範囲は東西約150m、南北約180mで、周長は600mと推測され、平面は歪な台形状を呈している。内部は宅地が密集し、北端一帯は畑地となる。また、南側から北側にかけて標高が上がり、最も低い南西隅には井戸が見られる（写真32)。

『霞浦県誌』では長興村に所在する「塘辺堡」に比定することができ、今に残るとのみ記される。

４．長春鎮区

①武曲城堡（図９）

東冲半島の付け根に位置する海岸線の西側、東吾洋の最東端の沿岸部に位置する武曲集落の北側に石積みで囲繞された空間を見ることができる。この集落の周囲は水田や畑地が広がり、西へ約200mの位置で海岸線となる。集落の立地は海岸段丘面の縁辺部で微高地となる。

石積みの城壁は全面において確認することができるが、南西面の城壁は近年の改修による積み直し等で改変が著しい。内面城壁には1991年に実施された修復を記念した石板が設置されている。城門が一カ所、南西面の中央に配置されており、切石で積まれたアーチ門となっている（写真33)。この城門も1991年にかなり改変を受けており、旧状を窺うことはできない。アーチの眉石上に「駐熹門」と刻まれた石板が嵌め込まれており、門上には祠が建てられている。また、この城門の南北に延びる城壁の高さは６m前後あり、城壁上にはイミテーションとしての女墻が城壁修復の際に付け加えられている。西隅の城壁は宅地化によって失われており、北西面は城門が１カ所、取り付く（写真34)。この城門は３枚の天井石を架設しており、その上には建造物の壁面が一面のみ残されている。また、門上には外面に面して建物壁面が残存しており、間口部分にのみ石畳が残っているのが確認することができる。城門を過ぎるとすぐに両側に石積みが張り出しており、通路状となる。城門附近の城壁は外面の高さが３～3.5mで、内面は約2.5m、基底部の幅は４m、上端幅は3.5mを測る。後述するが当初は北東面に取り付いていた城門を清代に当該地に移設したという伝承が残る。この城門附近の城壁は残存状況が良好で

図８　長興（塘辺）城堡平面概要図

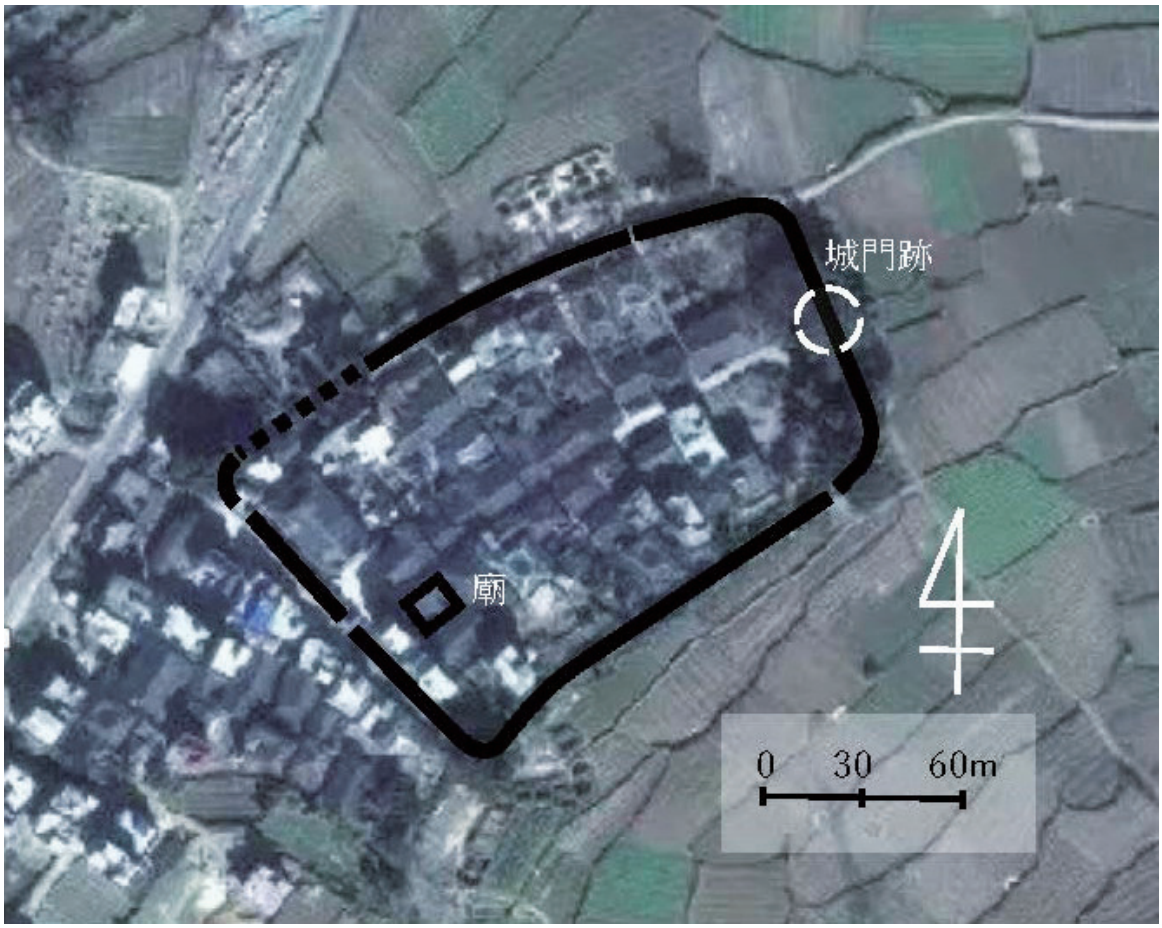

図９　武曲城堡平面概要図

あるのに対して、北側のそれは石材の撤去もしくは、宅地造成により削平を受けている。北東面の城壁の中央付近には「堅獅頭石敢當」と呼ばれる石柱が城壁外面に埋め込まれているのを確認することができる。この石柱は高さ約２ｍで、表面には銘文[註11]と獅子面が刻まれている（写真35）。なお、銘文は経年による摩耗が著しく判読することができなかった。石柱の下部には台石が城壁内に嵌められており、地表面から１ｍの位置にある。伝承ではかつて北東面には城門が設けられていたが、集落の北東方向にある虎頭山の虎がこの城門から侵入し、多くの集落民が犠牲となった。このため、清代に城門を北西側へ移し、この城門は閉塞することとなり、その際に石柱を嵌め込んだとある。集落の営みを考える上で鬼門除けとも解釈できる珍しい事例と言える。この周辺の石積みは高さが２～3.5mを測り、最も残りが良好である。南東面の城壁は北側の一部が集落への進入路によって崩されている以外は比較的、残りが良いものの、石材が撤去されている箇所がいくつか見られる（写真36）。高さは３ｍ前後を測る。

城壁で囲繞された範囲は南西－北東軸で約150m、南東―北西軸で約120m、周長は525mとなる。城内は宅地が密集しており、北東側の一部は空閑地となる。南西面の城門から「堅獅頭石敢當」と呼ばれる石柱まで街路が直線状に貫通しており、北西面の城門へ繋がる直線状の街路が分岐している。この２本の街路が城内の主要通路として現在も機能している。

『霞浦県誌』では今に残るとあり、先の修復記念石板には1555年に築かれたと記されている。また、1593年には明軍が城郭の東側に入り、倭寇を殲滅させており、その後も40年間にわたって明軍が駐屯したとある。また、城壁上の四隅にはかつて物見台が設けられていた[註12]。

②伝臚城堡（図 10）

東冲半島の中部に位置し、東吾洋の海岸線から東へ約200mの位置に伝臚集落がある。周囲は水田と畑地が広がる平地に立地しており、集落の北側に石積みで囲繞された空間を見ることができる。

石積みの城壁は全面において確認することができる。但し、その多くが積み直しなどの改修が近年において行われている。とくに東面と北面の城壁は上部に女墻の増築（写真37）、南東隅、北東隅、南西隅の城壁上には八角亭が新設され、東面外面には舗装園路といったような公園化に伴う改修が至る箇所において施されている。北面の城壁に取り付く城門はアーチ門で、高さ５ｍ、幅2.5mとなる[註13]。眉石上には「古方伯里」の石板が嵌め込まれており、この設置が1987年と記されている。城門は全体的に改修が行われていることから、おそらく1987年に大部分が改修されたものと思われる。内面は石積みが旧状を保持している箇所が多く見られ、南面の西側において城壁上へ登る石段を確認することができる（写真38）。西面の城壁には北寄りに城門が取り付いており、高さ3.2m、幅2.4mの女墻を伴ったアーチ門となる（写真39）。眉石上に「阜成門」と刻まれた石板が嵌め込まれていると共に、「癸未年重修」とあることから、この城門は2003年に改修が行われたことが見て取れる。西面の城壁は城門周辺以外、改修がほとんど行われおらず、城壁の高さは2.5～3.5mで上端幅は3.5～４ｍを測る（写真40）。北面の城門は東寄りに位置し、こちらも近年に改修されたアーチ門となっている。門上には「伝臚」と刻まれた石板が嵌め込まれており、その上部には女墻が見られる。この城門に入るとすぐに正統年間（1436～1449）に設置された「臨水宮」の建物がある[註14]。南西隅の城壁は全面的に積み直しが行われている。

このように城壁は全面において見られるものの、近年の改修が各所に見ることができる。とくに東南北面の城壁については、高さ５ｍ前後を有するものの城壁が嵩上げされ、その上に女墻が新たに設置されていることから、本来の城壁高を窺い知ることができない。

城壁で囲繞された範囲は東西約150m、南北約180mで、城周は740mであり、平面プランは概ね正方形となる。内部は南城門から北面城壁、北城門から南面城壁まで南北に貫通した街路を見ることができ（写真41）、城壁内面に沿って通路が伴っている。これらを東西に結ぶ街路が複数見られるものの、東西方向を貫通する街路は見られない。

『霞浦県誌』では今に残り、数年前に修復を行ったと記されている。また、『林氏家譜』には嘉靖24年（1545）に築かれたとある。南門にある重修碑

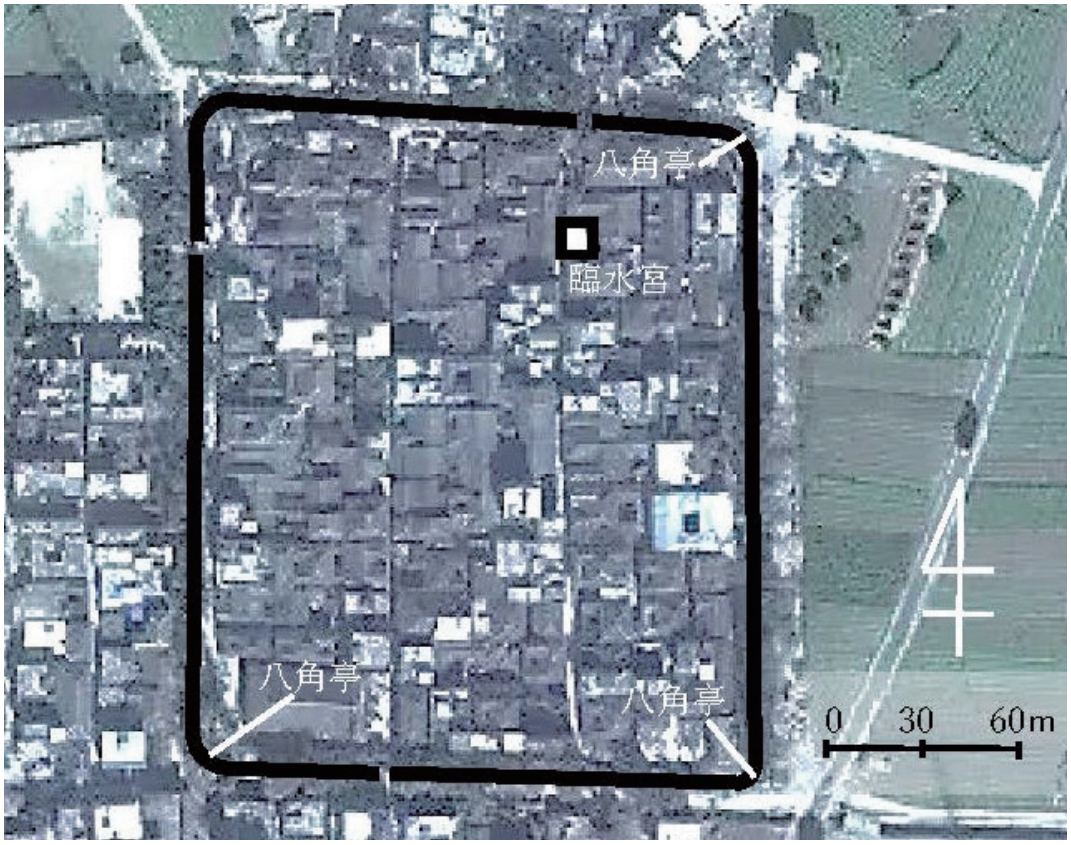

図10　伝臚城堡平面概要図

図11　長溪城堡平面概要図

には万暦年間（1573 ～ 1619）に改築されたことが記されている。1986年には霞浦県級文化財保護単位に、1997年には省級文化財保護単位に指定されている。

③長溪城堡（図 11）

東冲半島の中部を南東から北西方向に流れる長溪は、当該半島内を流れる河川の中で最大の河川面積を有している。そして、内陸部の山地から東吾洋へ流れることから、大きな河川浸食谷が形成されており、長溪集落はその東岸の河岸段丘上に位置する。このように長溪集落では長溪が近くに流れていることと、東冲半島東岸へ至る街道が隣接していることから、内海側の物資と外洋側の物資が搬入される、物流の要所であると言うことができる。東側には長溪と街道が隣接し、東南北側は畑地が広がるこの集落の中心部に石積みで囲繞された空間を見ることができる。

石積みの城壁は東南北面が比較的良好に残存している。とくに東、北面の城壁は残りが良く、高さ3.5 ～ 4 m、上端幅3.5mを測る。北側には長溪へ至る小河川が流れており、護城河としての機能を果たしている。また、北西部の城外側は公園化がされているものの、現状改変はあまり見られない（写真42）。なお、北東隅からは明、清代の青花を数点、表面採取することができた。東面の城壁は一部、農道として後世に開削された部分が見られる以外は改変が見られない。そして、開削された城壁の断面（写真43）から龍泉窯系青磁碗、褐釉陶器の破片を各１点採集することができた。南面の城壁は東側が宅地によって撤去されている以外は良好に残存している。この中央あたりに天井石を６枚架設した城門が取り付いている。城門の高さは2.8m、幅は1.8m、奥行きは2.5mを測る。城門内側は本来、石積みが両側において張り出していたが、東側は後世に小祠が設置されており改変を受けている。また、城門内側は瓦を葺いた屋根が架設されている（写真44）。西面の城壁は北側に取り付いている城門周辺のみが残されている。城門は４枚の天井石が架設され、幅1.3m、高さ２m、奥行き２mを測る（写真45）。更に城内側は石積みが両側に張り出し、通路状となる。城壁は城門の北側においては外面が建物によって崩されているが、内面は北西隅部へと続いており、対する南側は城門から15mほど続くが、その先は宅地化により失われている。高さは2.5 ～ ３mで、城内側の石積みは上端が大きく崩されている。このように西面の城壁は大半が崩されているが、南西隅の宅地壁面において、かつての西面城壁の姿をイメージしたと思われる壁画を見ることができる（写真46）。

城壁で囲繞された範囲は東西約120m、南北約150mで、周長は約520mと推測され、平面プランは南北方向に長い長方形状となる。南面の城壁は東西方向に直線状となるが、北面と東面は城外側へやや屈曲する。なお、城外南側は平坦地が広がるの対して、北側は小河川を挟んで、やや低地となり、東側は西側の山地へと続く斜面地が広がる。城内は宅地が西側一帯に密集し、東側は廟と畑地が広がる（写真47）。東側も近年まではかつては宅地が密集していた。また、南北に貫通する街路が２条見られ、うち西側の街路は南面の城門から延びている。この２条を東西に結ぶ街路は数条見ることができるが、東西方向に貫通する街路は現在見ることができない[註15]。

『霞浦県誌』では今に残ると記されるのみで、築城時期については嘉靖年間（1522-62）に築かれた城堡の一つとしている。

５．下滸鎮区

①文明星城堡（図 12）

文明星集落は東冲半島の中で内陸部山地内の小盆地に位置している。東冲半島内で最も内陸部にあり、当該集落からは海岸部を望むことはできない。また、当該集落が立地している小盆地内には水田と畑地が見られ、一帯には田園風景が広がる（写真48）。この集落の中心部に石積みで囲繞された空間を見ることができる。

城壁は北西隅と南東隅が宅地化により崩されている以外には残存状況は良好である。城門は北面と東面の城壁に取り付いており、東面の城門（写真49）内には1987年に改修が行われたことが記された石板が嵌め込まれている。また、この城門外の北側には井戸が隣接している。この付近の城壁は高さが2.5 ～ ３mとなっている。南面に取り付く城門に関しても東面の城門と同年に改修されたことを示す石板が

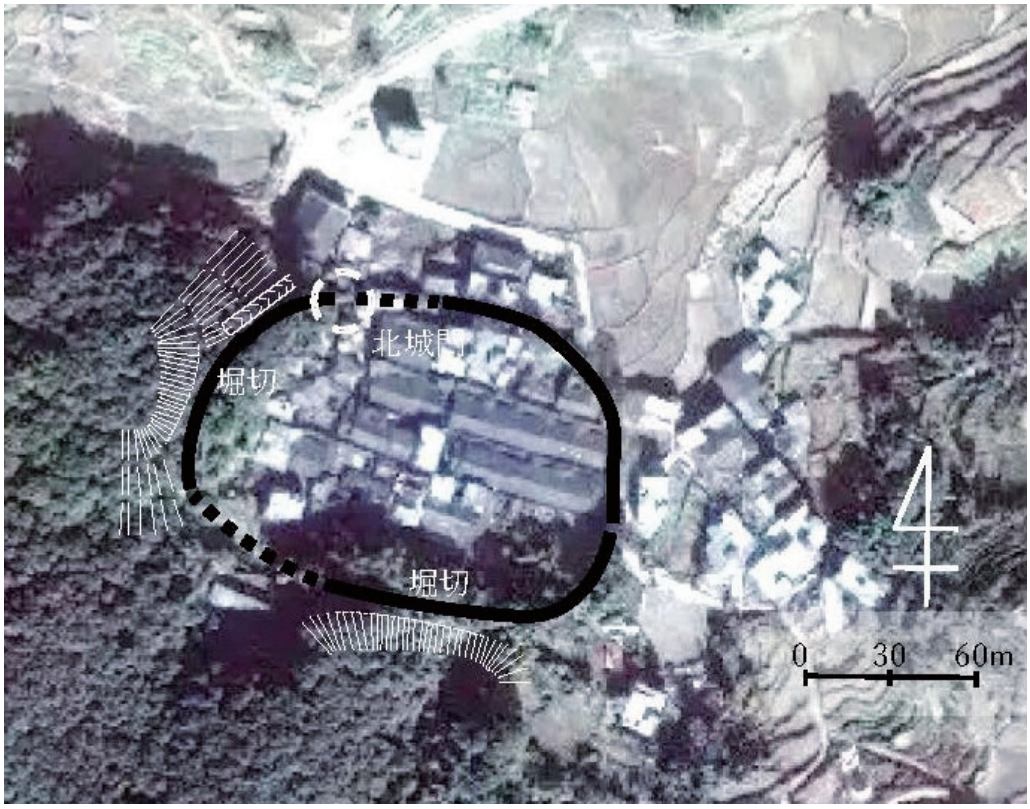

図12　文星明城堡平面概要図

図13　外滸城堡平面概要図

当該城門の基礎近くに嵌め込まれている。両城門ともに同規模となっており、門上に天井石を架設している点でも同様の規格となっている。北面の城壁は高さが2.5～3m、幅約3mで、集落内において最も標高の低い場所に位置している（写真50）。集落は南西方向に向かって傾斜を有しており、西端と南端は山野内まで城壁が設置されている。北西面の城壁は最も勾配があり、西端の尾根を横断するように延びている。加えて、北西面の外側城壁際の斜面地には竪堀状の溝が一条、南北方向に走っているのが確認できる（写真51）。溝の幅は3m前後で西側尾根近くまで延びている。西端の城壁は尾根を切った切土面を利用して高さ約4.5mの石積みを配置しており、東側へ続く尾根筋を完全に遮断している（写真52）。この尾根の南側は緩斜面となり、城壁も緩やかに斜面に沿って下っていく。しかし、その先の南西側は近年の宅地化により城壁は撤去され、その痕跡は全く留めていない。南面の城壁もさらに南へ続く尾根を横断するように延びており、やはり尾根筋を完全に遮断している。現在、この遮断線に沿って車道となっていることから、城壁の下部近くは近年において、削平されたと考えられる（写真53）。また、尾根の東西斜面は東側の尾根と比べて、かなり緩やかになる。城壁の高さは約3.5mを測る。

城壁で囲繞された範囲は東西の長軸で約150m、南北の長軸で110m、周長は約440mと推測され、平面プランは楕円形状となる。特徴としては南側と東側の山野部まで城壁がめぐり、何れも尾根線を遮断している点にある。このように堀切として機能が両地点において見られることで、より閉鎖性を高めていると言える。また、東側の尾根から北側斜面にかけて確認された竪堀状の溝は城壁と地表面との高低差を創り出すと共に、足場をより不安定にさせることで城壁への接近をより困難にさせている。これらのことから、城壁とその外側にそれを補う造作を行うことで防御性を高めている点で他の事例とは異にしている。城内は宅地が密集しており、東西方向に通る3本の街路が見られ、うち南側の街路は東面城壁に取り付く城門へと通じている。南北方向の街路は東西方向の街路をそれぞれ繋いでいるが、貫通する通りは見られない。

『霞浦県誌』では俗称が「文星坪」であるとし、宋代に儒学者・朱熹が偽学の難[註16]を避けて、この地へ逃れてきたと記されている。村名はこの地で朱熹が空を見上げて文星[註17]が再び明るく輝くと述べたことに由来するとも記されている。また、集落内には朱熹の指示によって集落民が開鑿したという伝承を有する「朱公井」と呼ばれる井戸があり、現在も生活用水として利用されている[註18]。

②外滸城堡（下滸城堡）（図13）

東吾洋の南岸で東シナ海との距離が最も近く、かつ東冲半島でもその幅が最も狭隘となる平坦地に外滸集落は位置している。南西側は海岸線に面し、北側から西側にかけて低丘陵が広がる外滸集落の中心部に石積みで囲繞された空間を見ることができる。

石積みの城壁は全面において確認することができるが、北西面の城壁は外面の石積みは積み直し並びに城壁上には新たに女墻が付け加えられていることから、近年の改修が著しいことが分かる（写真54）。内面は比較的、改修を受けていない部分が多く見られる。また、2カ所の城門についても、共に積み直しが行われ、アーチ部分の目地にはモルタル材が間詰めされている。北側の城の内側には城壁上に登る石段を見ることができる。この城壁に沿って護城河が見られるが、これらも周辺の整備によって大きく改修を受けている。南西面の城壁については、北西隅周辺は改修を受けているものの、南西隅周辺は改修をほとんど受けていない。内外面共に切り崩されている部分が見られるものの、高さ4m前後確認することができる。この面に取り付くアーチ門は当該城郭の中で唯一原状を保持しており、高さ1.9m、幅0.9m、奥行き2mを測る。外面のアーチ部は3枚の眉石で組み合わされている（写真55）が、内面は長手の石材の小口を面にしてアーチを組み上げており、12個の石材を組み上げている。このように、内面と外面とでアーチの構造が異なる。この城門周辺は全て切り石が用いられており、組み方は横目地が通るように長手と小口を交互に積み上げている。城門の内側は石積みが両側に張り出しており、通路状となる。南西面の城壁に見る残存状況は良好で高さは5m前後を有している（写真56）。城壁は直線状に延びており、北側と南側に城門が取り付いている。南側の城門はアーチ門となっており、近年

において改修されている。この城門は他の城門と比較してもかなり規模が大きいことから、旧来の形態であるかは検討を要する。眉石上には「南門」と刻まれた石板が埋め込まれている。北側の城門は天井が無く、間口周辺も後世による改変が多く見られる。また、周辺の城壁上が一部宅地となっていることから、かつての状況を把握することは困難となっている。北東面の城壁は高さ約５ｍを有しており、直線状に延びている。この面には城門は見られないが、中央あたりが切り崩されており、車両が進入できる通路が設置されている。城壁上の幅は２ｍ前後となっている（写真57）。北側と南東面の北側の城門に関しては、旧来は天井石を架設する形態であったことが、そして他の城門はアーチ門であることが、城外の案内板において記されている。

城壁で囲繞された範囲は北東―南西軸約240mで、北西―南東軸約140m、城周は668mであり（廖、隋2014）、平面プランは長方形状になる。南西隅から北隅にかけては城壁ラインが屈曲しており、護城河との関係が示唆される。一方で北隅から東隅、更には南隅にかけての城壁ラインは直線状に延びている。城内は南東面の北側城門と北西面の北側城門とを結ぶ街路以外に城内を貫通する通路は見られず、北東から南西方向に並行して直線状に延びる街路3条が並行しているのを城内中央付近に見ることができる。これらは城内を貫通していないものの、この街路を中心に清代まで遡ると思われる木造建築が集中していることから古くまで遡る可能性がある。また、城内の西端以外は宅地が密集している。

『霞浦県誌』では「下滸堡」に比定することができ、今に残ると記される。また、この村に残る石人伝説についても詳しく触れている（註19）。築城時期については1555年に築かれたとされている（廖、隋2014）。

６．城郭としての特徴

今回、報告した城郭遺跡は東西南北面が残存している事例を中心に取り上げた。本章では前章までに紹介した12例と報告を割愛した５例（註20）を含めた17例を対象にして当該地域に見られる城郭遺跡の特徴を①立地、②平面プラン、③防御施設、④城壁形態、⑤石積み技法に分けて詳しく触れていきたい。

①立地

平坦地に立地している事例が大半を占めている。文星明城堡や長興城堡では山野部を含み込むかもしくは、緩斜面部に立地しているが、このような事例は稀である。また、小馬城堡のように西側が平坦地で、東側丘陵を一部、取り込むといった事例も見ることができる。

周辺環境としては田畑が広がる事例が多く見られるが、小馬城堡や呂峡城堡、外滸城堡や厚首城堡のように海岸線に隣接し、泊や海浜を見ることができ、長溪城堡のように河川に沿っている事例なども見ることができる。他に主要な街道が近くを通る事例として八堡城堡や小馬城堡、長溪城堡などに見ることができる。これらのことから、人やモノの流入が頻繁な集落においても城壁を築く状況が見られることは、倭寇などの無頼集団にとっても人とモノの移動ルートを利用していた可能性が十分に考えられる。

②平面プラン

基本的に方形を志向しているような平面プランが多いと言える。とくに伝臚城堡や八堡城堡では四辺の城壁ラインは直線状に延びており、規格的な平面プランとなっている。隅角部は曲面を有しているが、これは当該地域にある城郭遺跡の全てに当てはまる。上記の２例以外も城壁ラインは直線状を基調としており、河川や水源地、緩斜面が隣接するといった地形的制約により、蛇行している城壁ラインが確認できる事例もある。これらは地形的制約が無ければ規格的な方形プランを成立させていたものと思われる。

他方で、文星明城堡や長興城堡のように城壁ラインの平面プランが楕円形や曲線状が多く見られる不整形を呈する事例も見ることができる。これらは斜面部や山地を取り込んでいることから、地形的な制約を大きく受けていることに因ることと、地形を利用した防御施設を附設させるためにあえて曲線状に城壁を延ばしていることが考えられる。また、小馬城堡では丘陵を取り込み、その稜線に沿って城壁ラインを配置していることから、方形を前提としていないことが分かる。更に平坦地においては城壁ラインが直線状に延びており、隅角部は直角に折れている。このことから平坦面においては方形を志向して

いるといった二面性を上述した小馬城堡から窺い知ることができる。

③防御施設

今回取り上げた城郭遺跡全般に言えることであるが、複雑な出入口や城壁に付随した張り出しなどの施設はほとんど見られず、障壁としての城壁に防御機能はほぼ限定されている。例外的に八堡城堡では甕城が見られるが、城門に関しては平入り状となる。但し、城内側の城門両脇は城壁が張り出して通路状としていることから、阻塞物を設置して進入を阻む効果を有する。城壁上には女墻が残る事例がいくつか見ることができ、中でも八堡城堡に関しては街道に面した城壁の上部に銃眼を確認することができた。

城壁外に防御施設を配置しているのは文星明城堡で、堀切２カ所と竪堀１カ所が確認された。堀切は尾根沿いからの進入を阻むための切通しで、竪堀は城壁のすぐ外側に設けられていることから、斜面部から侵入する寄せ手に対して、城壁により高低差をもたせて阻むといった効果が考えられる。また、小馬城堡では隣接する丘陵の尾根沿いに城壁を配置して、尾根上を取り込むことで、城壁内を見渡すことのできる高所スペースを潰すといった意図も読み取ることができる。

④城壁の形態

多くの事例で城壁は高さが3.5mから７mを測る。城内側と城外側共にほぼ同じ高さで立ち上がり、土留め状となるような城壁は見られない。城壁上は幅約３～５m見られるが、上面は崩落もしくは積み直しが多く見られることから、本来の幅並びに形態を保持している事例は少ない。城壁上は石積みの女墻が残存しているのが八堡城堡と厚首城堡で確認されたが、他の事例では見られなかった。このような事例は当該地域では稀有なのか、或いはそれらの多くが後世に撤去された可能性が考えられる。また、八堡城堡では女墻に銃眼が穿たれているのを2カ所において確認することができ、何れも城壁近くを通る街道に向けている。

城壁上へ登坂する道は複数の面石を段状に張り出させて、その上面を踏み面にする階段が見られる（写真30）。また、城壁に沿って石段を設置している事例も見ることができる（写真５、38）。

最後に、城壁の内部構造においては土を充填しており、面石の控えもあまり多く取っていない[註21]。また、控え周辺には小振りな石が間詰めされているが、あまり密ではない。

⑤石積みの技法

石積み技法においては割石を素材に積み上げた野面積みとなる。横目地が通らない、谷積みのような積み方が多く見られる（写真40）。また、城門附近は切石積みを採用している事例が多く見られる。とくに、八堡城堡の城門のように横目地を通さずに切り石を組み上げており、角欠きも見られることから、技巧的な積み方を採用していると言える（写真16）。他方で、横目地が通る積み方も見られる。それは方柱状に加工した石材の小口を面に合わせて並べ、その上に長手を面にして並べて、それを繰り返して積み上げる技法が長興城堡や小馬城堡、南屏城堡、外滸城堡で確認することができ（写真57）、更に材の長手を面にして横目地を通す積み方も龍湾城堡や厚首城堡で見ることができる（写真23）。

以上は特筆される、城門における石積みの技法として挙げたが、対象とした多くは角部のみを切り石で揃え[註22]、その間は谷積みとする事例であった（写真18）。

城門を構成している石積みに用いられている石材に関しては、岩盤から割り取った際の矢穴が多く確認できた（写真３）。稀有な事例として長興城堡のように転用石を多用している事例も見られた（写真28）。

７．結語－中華世界における城郭としての位置付け－

最後に、中国国内の城郭史の中で、本稿で対象とした城郭遺跡がどのような位置付けになるのか粗描して、本稿のまとめとしたい。

中国国内で城壁が出現してくる最も古い遺跡として河南省の王城崗遺跡や平粮台遺跡を挙げることができる。その時期は竜山文化第2期、BC25～BC19世紀まで遡るとされている。これら城壁はいくつかの建物跡を囲繞しているとされ、王城崗遺跡や平粮台遺跡では平面プランは方形を基調としてい

る（小川1987、愛宕1991、江村2012）。また、王城崗遺跡においては城壁の隅角部が城外へ張り出しており、後世に見る角台を想起させるという指摘もなされている（七田2019）。その後、中国大陸全般の主要な都市において城壁を囲繞すると言った都市形成が普遍的に見られるようになっていく。それらの都市を囲繞する城壁の平面プランについて、かつて宮崎一定は戦国時代以降の中国大陸の城は方形を主としており、現今の中国に見る形式として理解している（宮崎1933）。すなわち、平面プラン上での方形はBC3世紀頃から中華領域で見られる都市に備わる城壁の基本形であることを意味している[註23]。

以上、中国国内において居住域に城壁を構築していく状況は本稿で対象とした城郭遺跡で見られるように、竜山文化期から明代においても継続的に行われていたと言える。また、本稿で対象とした城郭遺跡では平面プランにおいても全てではないが、方形を指向している事例が数多く見られることから4000年以上の間、平面プランとしての方形が踏襲されていると評価できる。

他方で本稿では取り扱わなかったが、福建省内に残存している14世紀後半に明朝が築いた所城においては平面プランが方形である事例は管見の限り見られないことから（山本2020）、中国国内における伝統的な城郭の範疇からは外れてくると言える[註24]。

このように明朝が築いた城郭は従来の形態から逸脱しているのに対して、民間が築いた城郭は従来まで見られる平面プランに固執している事例が多く見られる点で興味深い。また、本稿で対象とした城郭遺跡のうち、入り口については八堡城堡が甕城形態を採用している以外、全て平入り状の出入口であることや馬面や角台といった張り出し施設が見られる事例はほぼ皆無であることから、かなり単純な平面プランであると言える。このように横矢掛かりのような効果が得られる施設を有さず、あくまでも障壁としての機能のみに防御性の重点を据えている点で従来とは異なる城壁の形態であると評価できる。

加えて、少数ではあるが方形を指向しない事例についても触れておきたい。文星明城堡では堀切や竪堀といった地形を活かした施設を城壁外に展開していることについて述べたが、このことは中国国内の城郭遺跡において従来まで見られない、防御性を見出すことができる。中国国内でもおそらく最小規模の城郭遺跡に相当する文星明城堡は前代まで大規模な城郭遺跡には見られない細やかな防御施設を新たに創出するに至ったと考えられる[註25]。

最後に清代以降の築城の状況を見ながら、東吾洋、東冲半島周辺における城郭遺跡の意味について触れておきたい。本稿で対象とした城郭遺跡は16世紀代に築かれた城郭であるが、17世紀以降においては既存の城郭を補修並びに増築していくといった状況が多く、新たに居住域を城壁で囲繞するような事例は極めて少なくなる。あえて事例を挙げると台湾島にて1722年の鳳山県旧城、1788年の台湾府城の築城、1711年の新竹城での土壁構築と1827年の塼積み、石積みの城壁構築、1723年諸羅県城の土壁構築と1788年の塼積みの城壁構築、1811年の彰化県城塼積み城壁の構築（黄1992）などのように、石積みもしくは塼積み、土壁の城壁[註26]が18世紀から19世紀にかけて新たに築かれている状況が見られる。それでも広大な台湾島においては恒常的な城壁を築いた事例は16カ所のみで[註27]、約200年間の長きにわたって築城並びに修築や増築を行ってきていることに対し[註28]、16世紀前半から中頃にかけての短期間に城壁を多数の集落で築いてくる東吾洋・東冲半島周辺の状況は台湾島におけるそれとは明らかに異なる。以上のことから、本稿で対象とした城郭遺跡は一定期間の築城様態を示しており、中華世界における城郭の終末期様態として位置付けることができる。

本稿においては東吾洋、東冲半島周辺の城郭遺跡を主に触れてきたため、今回は粗々ではあるが、中国城郭史の中での位置付けについて少し整理してみた。また近く、子細な検証を試み、稿を改めて詳述していきたい。加えて、今回ほとんど取り上げることができなかった琉球列島のグスクについて、東アジアにおける城として意義について再考察していく必要性を強く感じるに至った。このことについて、まずは中国大陸に所在するグスクとほぼ同時期に築城された城郭遺跡について理解を深めていくことが、この問題を解消していくものであると思慮される。これらの点についても稿を改めて詳述していければと考えている。

【註釈】

（註１）明代の史料については『明実録』や『明史』等の史料間で倭寇における解釈に齟齬があるとしている（山崎2017）。倭寇の解釈については田中健夫、村井章介など多くの研究者によってその概念が提示されているが、それぞれにその解釈の範囲が異なることから共通概念で倭寇を捉えることは困難であると考える。本稿における倭寇については後世に編纂された地誌に記載される『倭寇』もその対象としていることから、倭寇の実態を更に捕捉できない状況となっている。本稿の第２章でも触れるが、史料上に見られる倭寇ならびに倭寇としてイメージされる14世紀後半から16世紀にかけての中国大陸沿岸部で展開された攻掠行為を本稿では含むものとする。

（註２）1386年に起きた林賢事件によって日本と明の国交断絶は決定的となったことで、日本による倭寇の取締りが期待できなくなった。そのため、明朝による独自の倭寇対策が打ち出されていくこととなる（檀上2007）。その一環として多数の所城、衛城が1387年から1388年にかけて中国沿岸部に築かれ、そして烽火台設置による通信網が整備されていく。

（註３）大金所城は万暦年間（1573 ～ 1620年）に修復が行われている（清華大学出版社2015）。この修復に伴う防衛強化については当該地域において倭寇による被害が大金所城周辺で拡大していることを暗に示している。

（註４）1839年に編纂された『福建通志』の「城池志」に、嘉靖年間に集落民が城堡としての利便性から、福建省沿岸部にて57カ所の城堡を築いたことが記されている。

（註５）霞浦県博物館の常設展示室「辺陲海防」には倭寇対策のために霞浦県内で45カ所前後の城堡が築かれ、うち29カ所が残存しているという説明書きが見られる。

（註６）東吾洋、東冲半島周辺に所在する松農城堡、南屏城堡、洪江城堡、漁洋里城堡、閩峡城堡の５城については城壁の残存状況があまり良好ではない、もしくは城壁が撤去されたことによる城域が確定できないため、詳細について山本2021で取り上げることにする。

（註７）城外側へ円形あるいは方形に張り出す形式の城門で、甕を縦に割った形に似ていることが名称の由来となっている。円形に張り出す形式を「月城」とも呼称される。

（註８）これらの板石の多くは文様構成が完結しない部分で分割されていることからも、破損後に城門の石積み材へ転用されたものと考えられる。

（註９）この廟の脇に建つ「燕楽亭史碑」には1763年に建造され、1921年に長年の風雨による浸食が著しかったため、改修が行われたことが記されている。

（註10）この数値は石積みそのものの高さで、城壁上に設置されているモルタル造りの女墻はこの数値の中に含まない。

（註11）石柱の上部には獅子面があり、その下に印刻で文字が見られる。経年劣化により「石」「欽」のみが判読できる以外は、読み取ることができない。

（註12）南西面の城壁に設置された修復記念石板の記述による。

（註13）城門の寸法並びに城周の数値は全て清华大学出版社2015に典拠する。

（註14）臨水宮の祭神は道教の一派の祖とされる陳靖姑、すなわち臨水夫人である。福建がかつて大旱魃に遭った際に臨水夫人が身を挺して雨乞いをし、流産の末に亡くなったという伝説がある。明代以降、主に福建省や台湾各地に臨水宮を建て、安産祈願の神として祀られている。

（註15）これら2条の街路は舗装されており石畳などは見られない。また、この道に面して清代まで遡ると思われる木造建造物を多く見ることができる。

（註16）「慶元の党禁」とも称される朱熹を中心とした程学、後の朱子学を1196年に弾圧した一連の事件。以降は偽学として朱熹の一派は糾弾され、朱熹は政権の中枢から駆逐されることとなる。

（註17）司馬遷編『史記』において、北斗七星の主星である「斗魁」を頂く６星を文昌星と称し、学問・文学の神として崇められているとしている。うち、北斗七星を形容する柄杓の水を汲む器に当たる四角形の4星、その右側にある6辺形を為す6星を「文星」とする。

(註18) 集落に残る伝承では文星明村と名称が付される以前の集落名は「牛身村」であったとされている。

(註19)『霞浦県誌』には外滸村の南40kmにある山の峰に人形の形をした２つの巨石があり、この石が人に化けて夜中に村内の女性を襲っていたため、集落の南門を閉めることとなった。それでも被害が止まなかったため、老婆が石人に糸を密かに結び付けてその居場所を突き止めた。そして、村人は神に祈り、人に化けていた巨石に雷を落とした。以降、石人は村へ来ることは無くなったという伝承が記されている。

(註20) 註６と同じ。

(註21) 石積みの内部構造については山本2019a、2019bで考察を行っている。

(註22) 日本本土の織豊系城郭ならびに近世城郭の石垣隅角部に見られる、算木積みの技法は見られない。

(註23) 宮崎市定は「城郭式都市」として名称を付しており、『戦国策』にある東周恵王の宜陽城を最初の事例に挙げている（宮崎1933)。

(註24) 但し、山東省や遼寧省に見られる衛城、所城の平面プランは方形としている事例が多く見られることから（張ほか2019)、福建省の衛城、所城のような平面プランが不定形の事例がこの時期において一般的であったとは言えない。後者においてはあくまで地域性の範疇で捉える必要がある。

(註25) 管見の限りでは、これまでに中国国内にて堀切や竪堀を備える城郭遺跡の事例は見ることができない。

(註26) 台湾島では恒常的な城壁が築かれる前には集落の外縁部を囲繞するように竹林を植栽して阻塞としていた。この竹林から石積み、塼積みの城壁へと変化してきたことが史料等から見て取ることができる（王ほか2018)。

(註27) 平面プランについては、台湾島や澎湖諸島に所在する城郭の内、台北府城のみ方形となり、他の城郭は楕円形や不定形となる（黄、鳴海1996)。

(註28) 1875年に起きた牡丹社事件を契機に、日本軍の遠征に備えて清朝は1878年から1893年にかけて台湾島と澎湖諸島に恒春県城、埔里社庁城、台北府城、雲林旧城、雲林新城、台湾省城、苗栗県城、媽宮城の8城を築いていくことから（王ほか2018)、これを数は少ないながらも短期間での築城ラッシュと捉えることができる。

【参考文献】

宮崎市定1933「中国城郭の起源異説」『歴史と地理』第32巻第３号　史學地理學同攷會

小川誠1986「城牆出現に関わる問題」『上智史学』第31号　上智史学会

愛宕元1991『中国の城郭都市』中央公論社

黄蘭翔1992「台湾新竹城における城壁の形成について」『日本建築学会計画系論文報告集』第438号　日本建築学会

黄永融、鳴海邦碩1996「清末における台北城の形態計画の理念に関する考察」『1996年度　第31回日本都市計画学会学術研究論文集』日本都市計画学会

霞浦県地方志編纂委員会编1999『霞浦县志』方志出版社

山崎岳2003「巡撫朱紈が見た海」『東洋史研究』第62巻第2号　東洋史研究会

檀上寛2007「『国初寸板下海』考」『明代中国の歴史位相　山根幸雄教授追悼記念論叢』汲古書院

江村治樹2012「河南竜山・二里頭・殷周都市の特質」『名古屋大学文学部研究論集（史学)』58　名古屋大学文学部

鄭樑生2013『明代の倭寇』汲古書院

蘇勇軍2014『明代浙東海防研究』浙江大学出版社

廖小軍、隋軍編2014『寧德古建筑』海峡出版発行集団　福建人民出版社

清华大学出版社2015『福建古建筑地図』

角道亮介2016「陝西省榆林市神木県石峁遺跡の発見と若干の問題」『駒沢大学文学部研究紀要』第74号　駒沢大学文学部

山崎岳2017「倭寇とはなにか」『歴史と地理』701　山川出版

周旻（編）2017『籌海図編』中華書局

王御風、林尚瑛、許淑娟、廖德宗、顔廷伃2018『衆志成城』高雄市政府文化局

七田忠昭2019「日本における城郭の誕生と日中関係」『佐賀県立佐賀城本丸歴史館研究紀要』第14

号　佐賀県立佐賀城本丸歴史館
山本正昭2019a「城壁の「かたち」で見る海外からの影響について」『しまたてぃ』№87　一般社団法人沖縄しまたて協会
山本正昭2019b「グスクの石積み遺構に係る若干の考察」『沖縄県立博物館・美術館　博物館紀要』第12号　同館
張玉坤　譚立峰　尹沢凱2019『明代海防防御体系与軍事聚落』中国建筑工業出版社
山本正昭2020「明朝が設置した福建省における城郭の特徴とその成立背景」『沖縄県立博物館・美術館　博物館紀要』第13号　同館
山本正昭2021「福建省沿岸部に分布する城郭遺跡の類型化とその特徴」『東アジアにおける南島研究』南島史学会（印刷中）

謝辞

本稿を執筆するに当たって下記の方々からご教示を賜った。末筆ながら芳名を記して感謝の意とする。（敬称略）

石井龍太（城西大学）、向井一雄（古代山城研究会）、髙田徹（城郭談話会）、森達也（沖縄県立芸術大学）、盛本勲（沖縄県立埋蔵文化財センター）

写真１　下村城堡　南側城壁

写真２　下村城堡　西側城門天井部分

写真３　下村城堡　西側城門基礎近くの石材に残る矢穴

写真４　下村城堡　西側城門

写真５　下村城堡　東側城壁石段

写真６　古県城堡　北側城門

写真７　古県城堡　城壁石積み

写真８　古県城堡　井戸

写真９　古県城堡　石積み転用石材

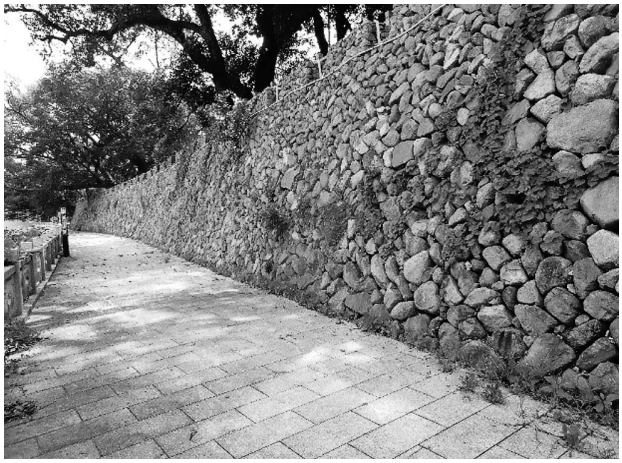

写真10　小馬城堡　公園内の城壁

写真11　小馬城堡　西側城門

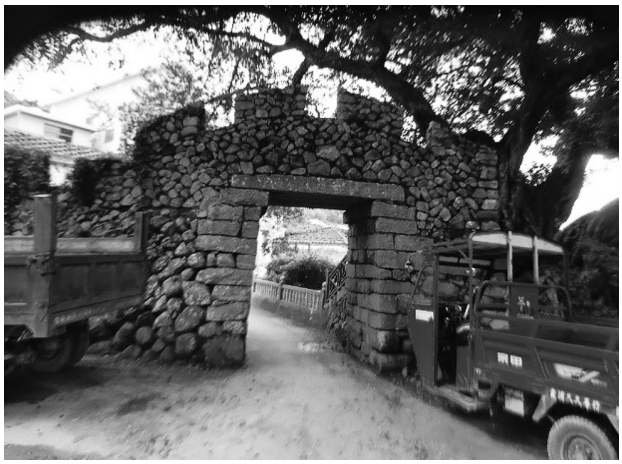

写真12　小馬城堡　北西側城門

写真13　小馬城堡　城壁

写真14　八堡城堡　甕城

写真15　八堡城堡　銃眼

写真16　八堡城堡　城門の石積み

写真17　八堡城堡　北側城壁沿いの石畳

写真18　八堡城堡　南東側城門

写真19　龍湾城堡　東側城門

写真20　龍湾城堡　北側城門

写真21　龍湾城堡　西側から南側にかけての城壁

写真22　龍湾城堡　城壁沿いの用水路

写真23　厚首城堡　西側城門

写真24　厚首城堡　女墻

写真25　厚首城堡　北側城門

写真26　厚首城堡　北側城壁

写真27　厚首城堡　東側城門

写真28　長興城堡　転用石材

写真31　長興城堡　石材撤去後の城壁

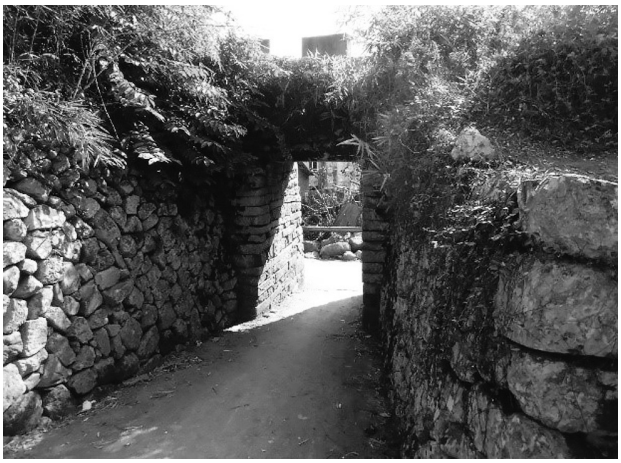

写真29　長興城堡　城門通路

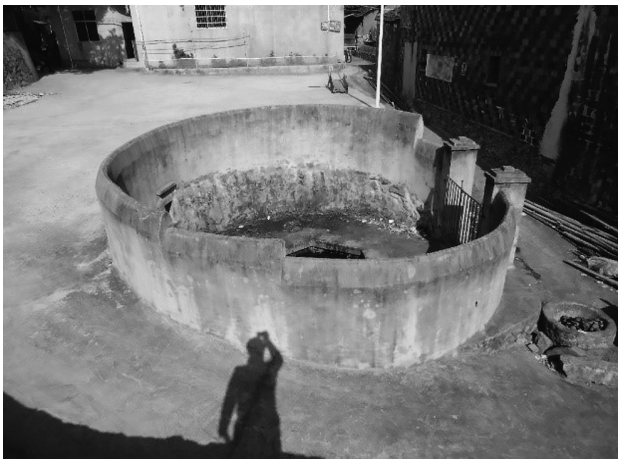

写真32　長興城堡　井戸

写真30　長興城堡　石段

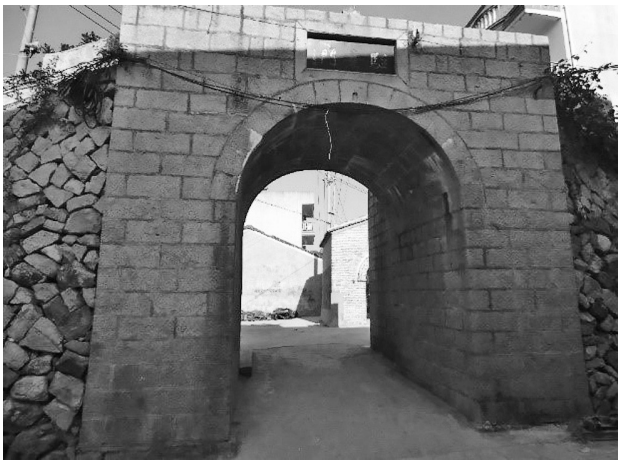

写真33　武曲城堡　南西側城門

写真34　武曲城堡　北西側城門

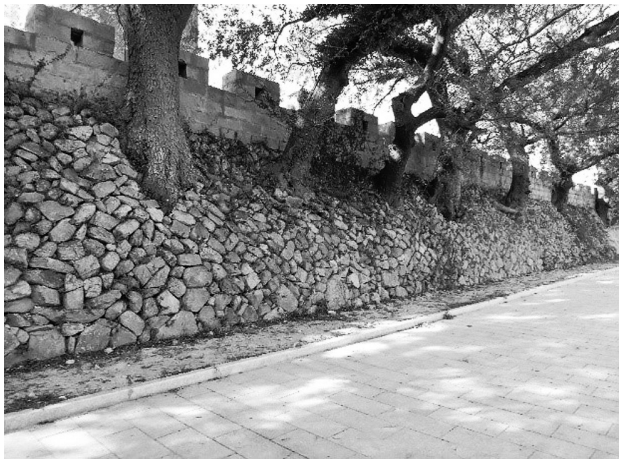

写真37　伝臚城堡　東側城壁と復元女墻

写真35　武曲城堡　石敢當

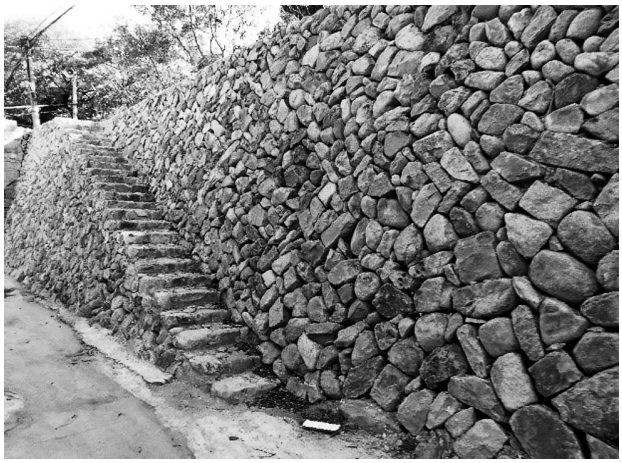

写真38　伝臚城堡　石段

写真36　武曲城堡　南東側城壁

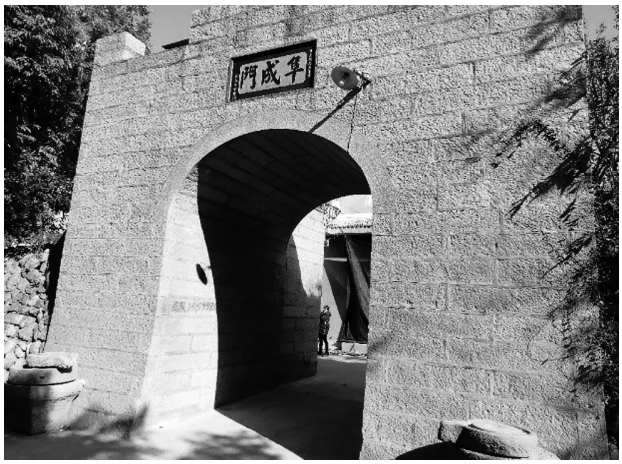

写真39　伝臚城堡　西側城門

写真40　伝臚城堡　西側城壁

写真43　長溪城堡　城壁断面

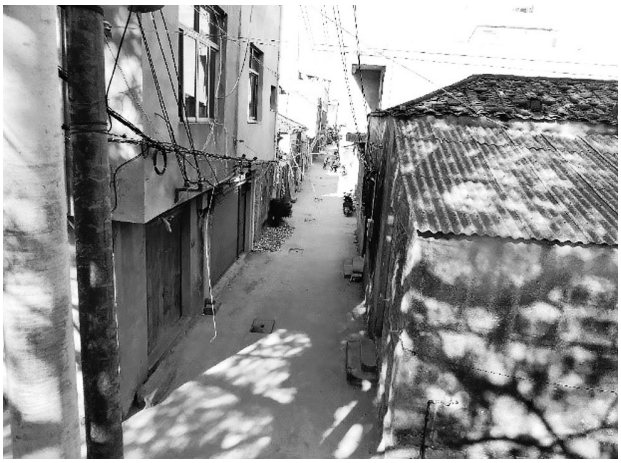

写真41　伝臚城堡内街路

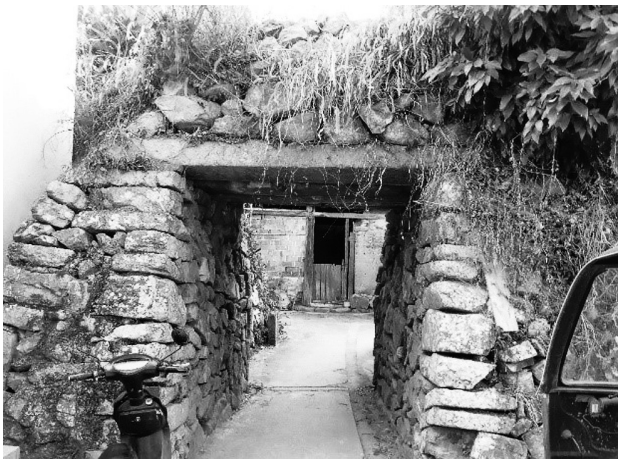

写真44　長溪城堡　南側城門

写真42　長溪城堡　南西側城壁

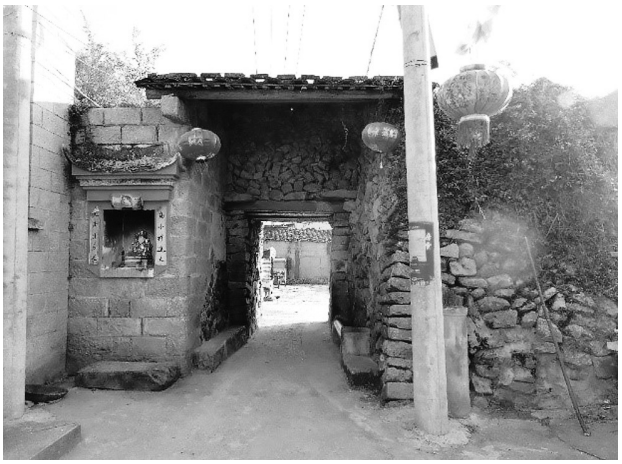

写真45　長溪城堡　西側城門

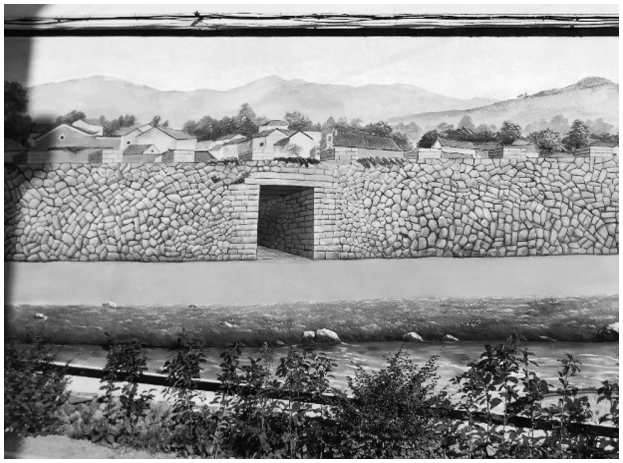

写真46　長溪集落内の民家壁面に描かれた長溪城堡の城壁と城門

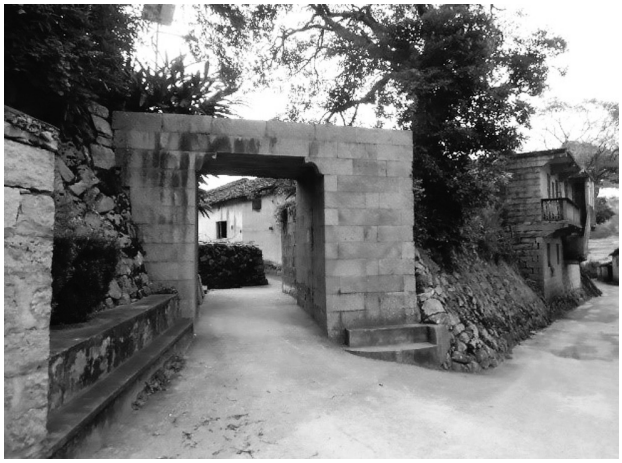

写真49　文星明城堡　東側城門

写真47　長溪城堡　城内東側全景

写真50　文星明城堡　北側城壁

写真48　文星明集落周辺

写真51　文星明城堡　竪堀状の溝

写真52　文星明城堡　西側切通し

写真53　文星明城堡　南側切通し

写真54　外滸城堡　北西側城壁

写真55　外滸城堡　南西側城門

写真56　外滸城堡　南東側城壁

写真57　外滸城堡　北東側城壁上面